

ジェンダー・エッセイ

東洋の豊かさ

作家 / 九州大学アジア総合政策センター特任教授 高樹 のぶ子(たかぎ のぶこ)

子孫をつくるためには、確かに男女明確な性が必要かも知れない。けれどそれ以外ではもっと沢山の性があるかもしれないような気がしている。

タイに出かけて、第三の性と呼ばれる存在を幾つか見てきたせいもあるだろうが、インド北部に残る古い教典TIPITAKAに、人類のジェンダーは4つあると書かれていると聞いて、その意を強くした。

これはイギリスの人類学者による発見だとか。男女の2つは判りやすいが、他の2つは解釈がいろいろあるらしい。書かれている言語はパーリ語だそうで、もちろん私には近付くことの出来ない領域だ。

ただ第三の性が、文化の爛熟や環境ホルモンと言った近代化の産物で、健康な古人(いにしえびと)には無かったという考えは否定されざるを得ないだろう。私達の意識のどこかには古人の強い生命力への憧れがあり、健康な古人は男女いずれかだったように、思い込みがちだから。

ギリシャ時代にも、アンドロギュノスつまり半陰陽はあった。両性具有は、生殖の面からは劣っていても、超人的な優位性を持っていた民族や時代があっても不思議ではないだろう。わたしには

その知識が無いけれど、そうした事例はありそうな気がする。

アメリカ映画で『ミルク』という秀作を見た。ショーン・ペン演じる同性愛者初の政治家が、銃弾に倒れるまでをドキュメンタリータッチで描いているが、公民権運動同様、マイノリティが公的な権利を勝ち取るまでには、いくつもの犠牲が出るのがアメリカかもしれない。

タイではお寺の僧侶がゲイで、しかも人望があり、人々の生活に入り込んで政治家のように中央との調整役を果たしているという現実も、珍しくはないそうだ。とりわけ地方ではよく見かける存在だ聞いて、『ミルク』とは大違いだと感じた。

タイという国が東洋思想を代表しているわけでは無いけれど、自由の国アメリカの同性愛者と比べると、人類には4つのジェンダーがあると考えたアジアの方が、第三の性にとって生きやすいのは間違いない。

第三の性を持つ人間の多くが、自分の人生を偽って生きているのは不幸だ。人間はもともと多くの性を持っている生命体だと認めたほうが、みんなが幸せになれそうな気がする。

Cutting-Edge

「カティング・エッジ」

Move この人にきく

不況期のいまこそ共働き主流モデルに転換を!

グローバル化の急速な進展により各国・地域が経済的相互依存度を強めるなか、今回の大不況は、世界を危機的な状況へと追い込んでいます。しかし私は、この大不況期こそ男女共同参画社会へと社会構造を大きく転換させるチャンスだと考える。確かに、「男は仕事、女は家庭」といづ片働き主流モデルは、高度経済成長期には合理的な面もあった。欧米先進国に追いつき追い越せという目標が明確で、高品質の製品を大量生産する上では職場の属性が揃っており、あうんの呼吸で業務を進める方が効率的だった。

しかし、今や世界第二の経済大国となった日本は、むしろアジア諸国など後発国から追いつかれる立場となり、経済モデルの転換を余儀なくされている。特に人件費が国際的に割高となった現状では、「付加価値」が重要だ。高付加価値の製品・サービスを生むためには、これまでのように属性が均質なモノカルチャーの職場よりも、むしろこれまで社会の周縁に置かれてきたからこそ持ち得る柔軟でユニークな発想や豊かな感性の女性をはじめ多様な人材を活かす職場が求められる。つまり、「共働きモデル」は日本の経済モデルの転換に応じた構造なのだ。

わが国が不幸なのは、すでに20年近く前に、片働き世帯数と共働き世帯数とが逆転したにもかかわらず、1968年のGNP世界第2位という強烈な成功体験が足かせとなって意識改革が進まないことである。特に各層の指導的立場にある男性の中には、いまだに片働きが主流だと勘違いをしている人が少なくない。その結果、基本的に、社会サービスがまったく人々のニーズに追いついていない。たとえば、医師は治療をするものの、療養の世話をしない。教員は授業をするものの、放課後の面倒はみない。介護ヘルパーは生活支援をするものの、話し相手にはならない。専業主婦が職を探したくても、子どもを預ける場所がないため就職活動ができない。つまり、基本的に「家に専業主婦がいること」を前提に、多くのサービスが提供されているのである。

しかし、近代資本主義が追及してきた性別役割分業による効率優先の成長・発展の結果陥った近年の袋小路から脱却し、仕事と生活の調和がとれた持続可能な社会を構築するためには、男性の意識変革が急務である。仕事優先の男性役割ゆえに可能であった「長時間労働は美德」という価値観に基づくダラダラ残業、付き合ひ残業、生活残業といった、これまでの非効率な「メタが体質」の職場から、「筋肉質」な職場へと変革することは、男性にとってもあらゆる従業員にとっても働きやすさにつながる。実際に、先進企業では残業がゼロに近づくとともに、休暇取得日数が増え、従業員はフレッシュして、さらに業務効率が上がるといふ正の連鎖が生まれている。

日本企業はこれまで、オイルショック、円高不況を乗り越えるたびに海外輸出を増やし、日本全体のGDPを伸ばしてきた。共働きが主流になった90年代はバブル崩壊期であまり経営環境が悪かったために職場改革が後回しにされてきたが、今回の大不況こそが、「共働きモデル」に合った職場改革により日本社会を活性化へと転換させる絶好のチャンスだと確信している。



CONTENTS

Move この人にきく..... p.1
 Books ジェンダー最前線..... pp.2-3
 Information..... p.4



(株)東洋経済研究所
ダイバーシティ&
ワークライフバランス
研究部長

渥美 由喜
(あつみ なおき)

未来・ことば

階級、人種、(ヘテロ)セクシュアリティ、そして国家が私たちを「女」として位置づける「女」は...それらを通して「女」になる

チャンドラ・T. モハンティ

米国ハミルトン大学准教授、トランスナショナルフェミニズム理論家(『第三世界の女性とフェミニズムの政治学』インディアナ大学出版、1991)



北九州市立
男女共同参画センター
ムーブ
〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107
ホームページ http://www.kitakyu-move.jp
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第35号
【発行】 北九州市立男女共同参画センター「ムーブ」
【発行日】 2009年6月10日

北九州市の男女共同参画統計データ集 2008

本書は、北九州市立男女共同参画センタームーブが、北九州市の男女共同参画の現状を示す各種統計を編集し、一目で見てとれるように図表にするとともに、わかりやすい解説を加えたデータ集である。北九州市の2008年の統計データだけでなく、時系列的比較や全国値との比較も必要に応じて挿入されており、北九州市の男女共同参画の現状を知るには、最適な1冊である。

たとえば特集「男女共同参画社会の実現に向けて 21世紀社会の担い手たち」では、各分野における「指導的地位」にある人たちの男女別構成割合が、北九州市と全国を比較する形で図表化されているが、ほとんどの項目で北九州市は、全国の数値・女性比率を上回る同じ数値となっている。この図表は、北九州市における男女共同参画の取り組みの成果を測る上で、有効な統計資料の1つであろう。

しかし、他方で、2020年の国の目標値である30%を超えていないのは、市区町村審議会委員や教育委員、短大の講師以上の

教員、薬剤師だけであり、他の項目は達成には程遠く、今後あらゆる男女共同参画の取り組みの必要性を示している。その他、少子高齢化や人口、仕事、家族、暴力など、重要なデータが配列されており、男女共同参画だけでなく、北九州市の現状を把握するうえで、意義ある資料集である。

年齢階級別労働力率

労働力率とは、人口を分母とし就業者と失業者を分子とする比率を言う。人口の中のどれだけの人が働いているかを示すものである。年齢階級別労働力率とは、この労働力率を各年齢階別に算出したものであり、日本では、男性は、20代後半から50代後半までが90%を超える台形を示すのに対し、女性は20代後半から30代前半がへこむM字型を取ることが知られている。欧米でも1960年代においては多くの国でM字型が見られたが、女性の社会進出やワーク・ライフ・バランス政策などの結果、今日では多くの国で、女性も台形となっている。

えはら ゆみこ
江原 由美子(首都大学東京都市教養学部教授)



北九州市立男女共同参画センター編
2009年初版
無料配布



人間開発報告書 2007/2008

気候変動との戦い 分断された世界で試される人類の団結

地球温暖化による気候変動問題と、地球上で26億人が1日2ドル未満で生活しているという深刻な貧困問題を始めとする人間開発の問題は、それぞれ異なる課題のように見えるかもしれない。しかし、気候変動は、農産物の減少や水不足、海面上昇、生態系の変化、感染症や病気の蔓延などをもちたらし、人間開発に対するこれまでの努力を台なしにしかねないという点で、両者は深く関連していることを本書は指摘している。

自然災害の年に生まれた女性の場合、同年齢の女性よりも就学率が低いケースが見られるなど、気候変動は男女間の不平等を助長しうる。また被害は、危機に対応する資力に乏しい貧困層や女性の方が深刻である。気候変動への適応能力の違いは、温室効果ガス排出量の格差などとともに、国際社会に「分断」を生み出している。

このような状況に対し、迅速かつ効果的な対応が迫られ

ている今日、国際社会の団結が不可欠である。日本を含めた米国、中国などの温室効果ガスの主要排出国は、ジェンダー間の不平等を助長しうる気候変動への取り組みに対し、より重い責務を負っていると言える。

人間開発指標

「人間開発」とは、自分が望む生活ができるように人間の持つ能力を高めるプロセスを意味する。人間開発の程度を測る指標は、人間開発指数(HDI)、ジェンダー開発指数(GDI)、ジェンダー・エンパワメント指数(GEM)、人間貧困指数からなる。平均寿命、識字率、勤労所得などを用いて算出するHDIに、男女格差を考慮したものがGDIであり、女性の政治参加や管理職の割合、勤労所得など女性の社会参加や意思決定への参加を測る指標がGEMである。2005年データでHDIランク世界8位の日本は、GDI13位、GEM5位となっており、気候変動問題へ団結した対応を取るためには、政策・方針決定過程への女性の参画の拡大、促進が急務である。

おひ みちよ
小尾 美千代(北九州市立大学外国語学部准教授)



国連開発計画 編
二宮正人、
秋月弘子 監修
阪急コミュニケーションズ
2009年初版
5,500円(税別)



ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして

概念は「サーチライト」に擬えられる。それまで看過されていた事柄に対し、新たな概念の登場によって光が当てられるようになるからである。その代表格として挙げられるジェンダー概念がこれまでに照射してきた範囲は極めて広いが、とりわけ教育界におけるそれは子育てや学校システムなど、私たちに最も身近なジェンダー問題を提起してきた。果たして今日のそれがどこまできめ細かに深く照らし出せているかを窺い知る上で、本書はこの上ない良書である。

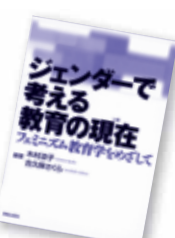
学校現場をジェンダーの視点で見つめ直し、そこにはジェンダー・バイアスを助長する隠れたカリキュラムがいまだ多く存在していることを浮き彫りにしてくれている。たとえ男女混合名簿は採用されても、特性教育論を前提とした実質的男女別習の体育授業「スポーツマン」でも「やんちゃ」でもないことで周辺化されてしまう一部の男子たち、セクシュアル・マイノリティである子どもの存在に氣

づかない教師の不用意な言動や無配慮な学校施設、「障害をもつ女子」に対する特有のジェンダー問題など、新教育基本法の下でさらに息苦しくなっている学校で懸命に生き抜かざるを得ない子どもたちの様子が、本書では見事に描出されている。

隠れたカリキュラム

学校のカリキュラムと言えば、国語や算数、体育といった教科を思い浮かべるだろうが、同時にそこには我慢、努力、忍耐、服従、協調性といった隠れたカリキュラムをも併せて伝達している。柴野昌山氏はこれを「表立っては語られることなく、暗黙の了解のもとで潜在的に教師から生徒へ伝達される」とする規範、価値、信念の体系と定義した。隠れたカリキュラムによるジェンダー不平等生成のメカニズムは、教師・生徒双方の自明視のもとで再生産されていることに鑑みれば、学校のみならず社会との共犯関係としての理解も必要であろう。

もとがね まさひろ
元兼 正治(九州大学大学院人間環境学研究院准教授)



木村涼子、
古久保さくら 編著
解放出版社
2008年初版
2,000円(税別)



諸外国における政策・方針決定過程への女性の参画に関する調査

オランダ王国・ルルウェー王国・シンガポール共和国・アメリカ合衆国

昨年調査の独・仏・韓国・フィリピン以上に、男女共同参画、特に雇用という視点からは、全く違う要素を持った4カ国が、調査対象となっているという印象を受ける。

オランダは自由主義が強い一方で、1982年のワッセナー協定以降、労使の合意のもとワークシェアリングを進めてきたことで有名である。ルルウェーは、強力な社民主義政策で育児を社会化し、「高福祉・高負担」の社会。シンガポールは、中国系女性の旺盛な社会進出志向と外国人家事労働者がセットになって、女性の地位が高い。アメリカは周知のように、強い自由主義と男女平等意識が、社会政策の不足を補っている社会である。

これだけ様相の違う国を見ると、逆に世界の中で、日本が参入にできる要素が何であるかが見えてくるような気がした。日本では現状のままで、高い税率への理解(北欧型)も、公的保育サービスの不足を個人が補うこのへ理

解(米国型)も浸透することは難しいだろう。外国人の移民も受け入れないとすれば、陳腐な結論だが、オランダの事例が、日本のこれからを見る上で最も参考になるのではないだろうか。

クォータ制

93カ国中54位という異常なGEM(ジェンダー・エンパワメント・メジャー)の順位を早くあげるには、クォータ制で女性国会議員の数を増やすことだ。国家主導でこうした制度を導入しているのがフランスや韓国である。しかしこれは日本では、被選挙権を制約するため憲法上認められない。だとするとオランダやルルウェーのように、政党が自主的に候補者の性比を調整する方法がある。大政党が女性候補比を3割にするだけでも大きいのだが。

せちやま かく
瀬地山 角(東京大学大学院総合文化研究科准教授)



内閣府男女共同参画局
2009年初版



ポーボキ、友情って、何色?

本書はさまざまな「友情」を想像することができる、年少者から高齢者まで楽しめる絵本である。長年にわたって、平和学、ジェンダー平等、セクシュアル・マイノリティ問題に関する研究・執筆・教育活動をしてこられたロニー・アレキサンダー氏は、2005年に「ポーボキ」という愛猫を失ったことをきっかけに、初めて絵本「ポーボキ、平和って、なに色?」ポーボキのピース・ブック』(エビック、2007年)を出版した。

平和問題についてはさまざまな理論もあるが、五感を軸にして、平和の色、味、音、などを感覚で実感することはそう簡単ではない。ポーボキとロニーの世界に入ると「平和」(そして「友情」)の感覚を取り戻すことが可能になる。「ポーボキのピース・ブック」は、東チモール、タイ、イスラエル、パレスティナをはじめ国内外で紹介され、現在、12カ国語に翻訳されている。

今年の4月に続編「ポーボキ、友情って、なに色?」ポーボキのピース・ブック2』が発行され、人気を集めている最

ポーボキのピース・ブック2

中である。「『ちがひ』を理由にみんなでいじめたり、差別することもある。『ちがひ』から生まれてくる恐怖や憎しみはやがて戦争にまで広がることもある」と言う。いじめ、DV、戦争などが日々続くなかで、シンプルな問題提起でありながら、人間関係、友情、他者とのコミュニケーションを根本的に考えるきっかけとなる作品である。1人で閲覧することも、学校、市民センターのワークショップで活用することもお勧めしたい。

平和・友情・平等の感覚

色彩、音、匂い、感触、味、「平和」や「友情」を実生活のなかで実現するためには、それらを「感覚」で覚えることや想像することが必要であろう。世の中では、いじめ、DV、戦争という暴力や他者の構造的暴力が続くなか、私たちが「平和」や「友情」を「感覚」として感じ取ることが難しくなっている。この絵本を読みながら、それらの感覚や、それらを想像する力を取り戻すことができる。

レベッカ・ジェニソン(京都精華大学人文学部教授)



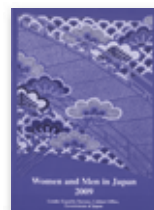
ロニー・アレキサンダー 著
エビック
2009年初版
1,429円(税別)



新刊・新着本紹介



キーコンセプト
ジェンダー・スタディーズ
ジェン・ビルチャー、
イメダグ・ウララン 著
片山亜紀 訳者代表
新編社
2009年初版
3,200円(税別)



Women and Men in
Japan 2009
内閣府男女共同参画局
2009年初版
無料配布



ビューティー・ソロンの社会学
ジェンダー・文化・快楽
ポーラ・ブラック 著
鈴木真理子 訳
新編社
2008年初版
2,800円(税別)



養育費政策にみる国家と家族
母子世帯の社会学
下真美幸 著
勁草書房
2008年初版
2,600円(税別)



ジェンダーと雇用の法
水谷英夫 著
信山社
2008年初版
2,800円(税別)